

芝居は人を変えるもの

——『恋におちたシェイクスピア』覚書②

英語英米文学科教授 村里 好俊

『恋におちたシェイクスピア』は、脚本家、劇作家、小説家として活躍しているアメリカ人のマーク・ノーマンと、『ハムレット』の二人の脇役を主人公とするポスト・モダン劇『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』*Rosencrantz and Guildenstern are Dead*（一九六六年）やジョン・フォード作『あわれ彼女は娼婦』*'Tis Pity, She's a Whore*をその作品の一部に利用した『リアルシング』*The Real Thing*（一九八四年）で有名な、英国を代表する劇作家トム・ストッパード *Tom Stoppard* がコンビを組み、綿密な時代考証を重ね、緻密に磨かれ考え抜かれた文章を駆使して、様々な意味・観点で極めて秀でた内容の脚本を元に仕上げられた映画である。

ノーマンは、一九八八年に学校でエリザベス朝の演劇を勉強していた息子と話をしていたとき、『ロミオとジュリエット』は喜劇として始まるが、途中で劇の流れが変わり、完璧な悲劇となる。当時としては過激な着想だ。シェイク

スピアの想像力をこれほど強烈に刺激した触媒は何か。それがシェイクスピアの道ならぬ恋だったとしたら」というアイディアを思いついたという（『恋におちたシェイクスピア』上演プログラム参照）。

確かに、『ロミオとジュリエット』の第二幕の終わりでは、たとえ秘密裡にであろうとも、ロレンス神父の仲立ちで愛し合う二人の結婚が執り行われ、当時の喜劇の常套手段であるハッピー・エンドという流れに沿って物語が進んでいる。この芝居は、その筋立てからしても、登場人物たちの喜劇的セリフ回しにしても、ここまでは喜劇の様相を強く呈している。ところが、第三幕に入ると、事態は急変してしまう。ロミオの友人マキューシオがロミオを憎むティボルトの挑発に乗ってしまい、街中で殺し合いの喧嘩を買って出るのである。ジュリエットの乳母がジュリエットの分身として愛の二面性の内の卑猥な部分を引き受けるのと同様に、マキューシオはロミオの分身として、ロミオの影の部分を担当（河合祥一郎『ロミオとジュリエット』恋におちる演劇術』白水社、二〇〇五年参照）。ジュリエットは、ずっと乳母を頼りに父母に逆らってまで行動しロミオに誠を尽くそうとする。父にパリス伯との結婚を言い渡され、抵抗はするが、終には信頼する乳母が追放されたロミオは死んでも同然として、父親の命に従ってパリスとの結婚を勧め、助言を聞いて、ロミオとの結婚を知っていながら、言わ

ば、重婚を勧める乳母を魔女・悪魔と罵り、己の分身である乳母と別れる決意をし、唯一絶対的信頼のおけるロレンス神父の許へ最後の相談に出掛ける。そして四二時間仮死状態になる薬を飲んで霊廟に納められロミオの救済を待つ覚悟をするが、棺の上で目を覚ますと、ジュリエットが死んだという間違った情報を得て、彼女が葬られている一族の墓所の棺台の前で毒を飲んで死んでいるロミオを発見する。胸騒ぎがしてその場所にやって来たロレンス神父と一緒に逃げようという言葉が無視して、とうとう孤立無援のジュリエットは、ロミオの短剣で胸を突いて自殺する。

ジュリエットが初めて登場した時には、全く世間知らずの深窓の令嬢として、母親や乳母の言うとおりに全てを受け入れていたが、ロミオに出会って恋をし、自立心が芽生えると、彼女は急速に成長し、一人前の成熟した大人の女性になっていく。有名なバルコニー・シーンで二人が愛を確かめ合い、本当に愛されていることが分かると、何と結婚の話をも最初に切り出すのは、ジュリエットの方だ。世間知らずのお嬢様から一気呵成に成熟した大人の女性になるのだ。一般に、女性は、一途に恋をすると、愛する男性にひたすら尽くす存在となり、彼以外のものはすべて捨てられるものだが、ジュリエット自身も、ロミオとの恋を全うするためには、父母を裏切り、一族を棄て、最後の命綱であり分身でもある乳母とも縁を切り、とうとうロレンス神

父をも退けて、ただ愛するロミオと天国で再会することを祈念して、彼を追いかけて死の国へ出立することを選ぶのだ。

これに対して、男のロミオはどうだろうか。最初、ロミオは、劇には登場しない不在の女性ロザラインに片思いする、男の思春期にありがちな恋に恋する若者として登場する。彼の恋が勝手な思い込みの偽物であることは、友人ベソヴォリオに向かつて、その片思いの女性への愛をへ撞着^{オクシ}語法^{モロン}を多用して思いの丈を訴える次のセリフを聞くだけで明らかだ。

Why then, O brawling love! O loving hate!
O anything, of nothing first create!
O heavy lightness! Serious vanity!
Mis-shapen chaos of well-seeming forms!
Feather of lead, bright smoke, cold fire, sick health!
Still-waking sleep, that is not what it is!
This love feel I, that feel no love in this.

(*Romeo and Juliet*. 1. 1. 176-182)

ああ、諍いながらの愛、愛するゆえの憎しみ。
そもそも無から生まれた有。
重々しい軽さ、生真面目な戯れ。
外観は美しく整っているが形の崩れた混沌。

鉛の羽毛、輝く煙、冷たい炎、病める健康。

常に目覚めた眠り、真実の眠りではない眠り。

微塵も恋心わかぬこの僕が、恋をしているとは。

ロミオが感じているこの愛は、実際には舞台に一度も現われないロザラインという名のみの女性に、つまり「実在しない」女性に対する愛であり、その種の愛が極めて技巧的常套的表現法の〈撞着語法〉を利用して表明されるのだ。ロミオはやがて実在する生身の女性ジュリエットに本命がけの恋をするが、ロザラインへの一方的な恋心は独りよがりで思い込みの激しい偽りのそれである。シェイクスピア時代の宮廷詩人たちの詩文には、エリザベス女王を恋人に見立てて恋心を捧げるといふ趣向の「遊戯としての恋」とか、実在しない架空の女性を想定しての、このような擬似的技巧的修辭的愛の表現が頻出していたのを、シェイクスピアが一般民衆という現実的な目を持つ観客の前で、舞台の上でなぞって、ある意味で、からかってみせているのかもしれない。そして、この映画では、ポートの上で、ウイルがヴァイオラへの愛の気持ちを入口に膾炙した〈撞着語法〉を多用し、ヴァイオラと知らずして、彼女が男装したトマスに伝えようとしたときに、トマス（＝ヴァイオラ）に小馬鹿にされたのと事情は似ている（この場面の詳細については、拙稿『恋におちたシェイクスピア』覚書①）

を参照のこと）。

ロミオは一幕五場、キャピュレット家で催された仮面舞踏会に友人たちと一緒に飛び入り参加した時に、運命の導きによってジュリエットを垣間見て、当時の慣例に従い「一目惚れ」で必然的に恋に落ちる。しかし、ロミオは男の本性に従って恋をしてもなかなか成長しない。確かに、宿敵ティボルトに喧嘩を吹っかけられても、彼の怒りを何とか鎮めようとするが、当時最大の侮辱的な言葉である臆病者呼ばわりされて、彼の分身であるマキューシオがそれを受けて立ち、結局、二人の喧嘩を留め立てしようとしたロミオの所為で、相手の剣で彼は突き殺されてしまう。これに激怒し、自らの臆病を責め、ロミオは仇を討とうとティボルトに討ちかかり、殺してしまう。ここからが悲劇の始まりだ。

翻って考えてみれば、この悲劇はひとえにロミオが作り出したものだ。ロミオが彼からの挑戦状に対して何も反応を示さなかったことに対して激怒しているティボルトだが、ロミオは前日からまだ実家に一度も帰宅していないのだから、彼からの果し状を読んでいないのは当たり前のことだ。ロミオは一体どうしてティボルトがそれほどまでに腹を立てているのかさえ理解できないでいる。突っかかってきて、挑戦を受けないロミオを臆病者呼ばわりするティボルトに対して、秘密結婚ではあっても、ジュリエットと

結ばれたが故に彼と親戚になったロミオは、何とかして彼を宥めその矛先を躲そうとするが、ロミオの分身であるマキューシオが黙ってはいない。ロミオも実は心の底では腹立たしきで一杯なのであり、それを彼の影的存在のマキューシオが代弁する形になり、ティボルトの挑戦を彼が受けて立ち、結局、躊躇するロミオの邪魔立てが入り、マキューシオは死ぬ。堪忍袋の緒が切れたロミオは、前後の見境がなくなり、影の仇を討つが、追放の憂き目にあう。つまるところ、すべての悲劇の種は彼が撒いたのだ。そして、逃亡先のマンテュアで事の真相を知らない従者から、ジュリエットの死の知らせを聞くと、共に死ぬためにヴェローナの町へ戻る途中で薬屋に立ち寄り、毒薬を手に入れる。しかし、なぜ毒薬なのか。男として、自らの剣で自殺すればよいではないか。毒薬を飲んで死ぬとは、彼の死に方は意気地なしで男らしくない。

これには、作者の仕掛けがあると思われる。これは、ジュリエットの場合とパラレルになっているのだ。ジュリエットは、ある意味で、毒薬に近い四二時間仮死状態になる薬毒を、恐怖に怯えながらも、飲んで仮死状態になる。それは、死んだと思われて墓所に葬られた後、彼女が目覚める頃を見計らってロミオが戻り、彼女を救出し、二人して新天地へ向かうという、希望に満ちた手段なのである。その新天地は、結局は、この世ではなく、あの世ということに

なってしまうが、いわば、彼女は、ロミオと違って、生きるために薬毒を飲むのだ。しかし、眼が覚めたとき、ロミオが傍らで死んでいるのに気付いてこの世での幸福を諦め、彼女はロミオの短剣で自らの胸を突いて死ぬ方法を選ぶ。その死に方にセクシュアルな意味を認めるかどうかはともかく、極めて勇敢な死に方だ。死ぬ方法でさえ、ジュリエットの方が感嘆と憐れみを誘う。(映画『恋におちたシェイクスピア』では、ジュリエットを演じるヴァイオラが眼を覚まし、「わたしの愛する方はどこ、わたしは今どこにいるのか分かってるわ。そして、予定通りの場所にいる。私のロミオはどこ」と言うのに反応して、観客席から彼女の乳母が思わず知らず涙ながらに、「死んだわ」と言葉を発するが、これは極めてその場に相応しい言い方で、非常に優れた演出になっていると思われる。)

男であるロミオは、自分勝手に喧嘩して、自分勝手に死んでいく。それも、ジュリエットを巻き込んで。女であるジュリエットは、恋をすることで一気に成長し、一途に愛して、一途に信じて、すべてを擲^{なげ}つて、最後には、ただ独りぼっちになるうとも、とにかく、一途に死んでいく。男と女の成長度の違いは、目覚ましいものだ。

さて、『ロミオとジュリエット』には、シェイクスピアの劇作法に倣って、一五世紀イタリアの物語「ジュリエット

タとロメオ」を英訳したアーサー・ブルック『ロミウスとジュリエットの悲話』やウィリアム・ペインター『悅樂の館』を初めとする数種類の材源があるのは確かだが、しかし、これがシェイクスピアの実人生との関わりから生まれた作品だと仮定すれば、どのような彼の人生が考えられるかを実験的に描いたのが、この『恋におちたシェイクスピア』なのである。

この映画の時代設定は一五九三年、シェイクスピア二九歳の夏（夏は恋の季節でもある）。間歇的に疫病がロンドンを襲い、劇場が閉鎖されている時期で、当時二大劇団とされた「宮内大臣一座」と「海軍大臣一座」の内、後者の座主かつ経営者であるフィリップ・ヘンズロウは、劇場閉鎖ゆえの借金苦に喘いでいる一方、前者の座主で花形俳優のリチャード・バーベッジは、饗宴局長ティルニーの介添えもあり、エリザベス女王の思召しで宮廷に呼ばれ、宮廷の宴会の間で、元々はヘンズロウの劇団のために書かれたシェイクスピア作の喜劇『ヴェローナの二紳士』を、ヘンズロウから無断で盗んで上演する。もともと、当時、版權などは明確でなく、劇作を盗んだり盗まれたりするの
は、日常茶飯事ではあったが。とはいえ、目下の状況では、明らかに、バーベッジにやや分があるようだ。

二一歳になる前に三人の子供たちの父親となり、その数年前から実父の商取引失敗による没落で経済的に困窮して

いた家族のため働き口を必死に探していたはずのシェイクスピアが、故郷のストラットフォードの実家に妻子を預け、何らかの伝を頼ってロンドンで一旗挙げようと上京し、何が切っ掛けは判然としないが、劇団に雇われ、恐らく初めのうちは様々な雑用をし、役者として舞台にも上がった後に劇作家になり、一先ずはやっと一人前の詩人・劇作家として活動を始めていたが、一〇作ほどを書いた現在、作家としての袋小路に陥っている。映画の中では、単身赴任ゆえに夫婦のベッドは冷め切っており、結婚自体が若気の至りであったと心理療法家、占星術師、予言者、夢解釈人、錬金術師かつ魂の司祭、つまりは、いかがわしい似非道学者のドクター・モスとの遣り取りで白状する。ウィルは「言葉、言葉、言葉（ハムレットの台詞）、昔は才能が溢れていた、陶工が粘土から陶器を作り出すように、言葉で帝国を覆すような愛を、地獄の炎に焼かれても、二つの心を結び付けて離さない愛を、尼僧院に暴動を惹き起こす愛を作り出すことが出来た」が、今や全く愛を描く作品が書けない事情を「靈感を与えてくれるミューズ女神、つまり真の魂を共有し合う愛する女性」がいないからだと述べるが、実は、彼の劇風がちやうど転換期にあり、これまで書いてきた自作の芝居に、とりわけ、作者の意向を無視して、アドリブで観客の笑いを取るだけの道化の独壇場に満足できなくなっていることに、彼はまだ気づいていな

いところから、この映画は始まる。

似非道学者モス博士から「紙に自分の名前を書いてこのガラス製の蛇型の腕輪の中に入れ、この腕輪を身に付けた女があなたの夢を見ると才能が復活し、言葉が川のように溢れ出す」と言われ、金を支払い手に入れたその腕輪をロザラインという黒い髪、黒い眼、浅黒い肌で、豊かな胸をしたバーベツジの愛人だが、恐らくウィルとも性的関係のある娼婦まがいの女性に、ミューズ女神になって欲しいとの願いを込めて渡す。このロザラインは、ロミオがジュリエットに出会う前に片思いで悩み苦しんでいた相手と同じ名前であるのが皮肉だ。シナリオ作者たちは、『ロミオとジュリエット』では実在しない空想的な恋の対象たる絵空事の女性を、全く正反対に、極めて地上的で世俗的で淫乱な、言わば、シェイクスピア作『ソネット集』に登場する「ダーク・レディ」紛いの女性として設定し、金髪、碧眼、輝くばかりの白い肌、「青リンゴのような」丸い整った乳房の「フェア・レディ」であるヴァイオラと対照的に描いている(パルトロウはヴァイオラ役に適任の美しい体をしている)。

捜していたミューズ女神が見つかったと思ひ込んだウィルは、一旦は、猛烈な勢いでペンを走らせ、ヘンズロウの思い付きの劇のタイトル『ロミオと海賊の娘エセル』ではなく、『ロミオとロザライン』第一場を書き上げる。それを携えて、バーベツジの家に急ぐが、ノックもしないで二

階の寝室に飛び込むと、ベッドでは、ロザラインと饗宴局長のティルニーがお楽しみの真っ最中だ。それにシヨックを受けたウィルは、自らの勘違いを悔み、折角書き上げた新作を通りの燃え盛る火桶の中に投げ込んでしまう。ロザラインへの愛が叶わないのは、ロミオもウィルも同じだ。

この後、ウィルは、単身赴任のロンドンで、成金貴族の令嬢ヴァイオラ姫と恋に落ちるが、それはある意味で必然的な出来事であった。ヴァイオラは芝居好きで、特に、ウィルの芝居の愛好者であることは、彼女が上演中の『ヴェローナの二紳士』の台詞を誦ぞくんじていることで明らかだ。また、ヴァイオラは、乳母に向かって「人生を覆すような愛、言うことを聞かない、手に負えない、心の中に反乱が起き、たとえ破滅することになっても、どうにも止められない愛を体験したい」と述べる。それはまさにウィルがこれまで描いてきた愛に等しいものだ。ヴァイオラがそれ心から憧れていることが二人の接点となり、二人を隔てる数々の苦難を乗り越えて、二人は愛し合うことになるが、この映画は、その体験を基にして現在進行形という形で有名な悲劇『ロミオとジュリエット』、そして身分違いゆえの二人の悲恋の後日談として、ヴァイオラを女主人公とし、彼の喜劇の最高峰とされる『十二夜』が生まれたことを、極めてスリリングでドラマティックに描いた秀作である。

この映画の中で、デ・レセップス家で開催された舞踏会

へ楽団員の一人に成り済まして忍び込んだウィルは、当家の令嬢ヴァイオラが踊っているのを見て、彼女に一目惚れする。この状況は、『ロミオとジュリエット』の中で、ジュリエットの屋敷での仮面舞踏会に友人たちと共に忍び込んだロミオが、ジュリエットに一目惚れする場面に転用されることになる。シェイクスピアと同年齢だが、詩人・劇作家として彼よりずっと早くデヴェューし、すでに当代一の人気作家になっていたクリストファー・マーロウ (Christopher Marlowe 一五六四〜九三) が自作の物語詩『ピアロウとリアンダー *Hero and Leander*』第一巻一七六行で “*Who ever loved that loved not at first sight?*” 「今まで恋をした者で、一目惚れでなかった例があるうか」(大塚定徳・村里好俊訳、『イギリス・ルネサンス恋愛詩集』、大阪教育図書、二〇〇六年、一二頁) と歌っているように、当時の恋の慣例に沿ってシェイクスピアは一目で恋に落ちてしまうのである。凶らずも、ヴァイオラは詩人・劇作家シェイクスピアの大的ファンで、彼の詩劇を通して、彼に密かに思い焦がれていた。

いやしくも貴族の令嬢が下々の者に交じって川向こうの歓楽街ザッツク地区の薔薇座、もしくは、北郊の壁の外に存在したカーテン座、シアター座という公衆劇場に芝居見物に行くのは避けるべきことであり、もし、どうしても芝居を見物したければ、女王陛下が宮廷に劇団を呼びつけて宮廷の宴会場で芝居見物されるときに他の宮廷人と一緒に

見物すればよいと言う乳母に反して、ヴァイオラは、観劇はもとより、自ら芝居に出たくて、それも、当時は舞台上に女性が上がることは法律で禁止されていたので、トマスという田舎出の若者で乳母の甥という触れ込みでオーディションを受け、ロミオ役を見事に射止める。トマスが実は愛するヴァイオラ姫だということを知らないウィルは、彼女への恋文と恋歌(ソネット一八番「君を夏の一日に喩えてみようか」)をトマスに託すが、彼女からの涙で滲んだ手紙をトマスから受け取ることになる。彼女の意思にかかわらず、宮廷での観劇の場面で彼女を見染めた、代々の古い家柄を誇る貴族のウエセックス卿と結婚することが、彼女と彼女の父親との間で、まるで商取引をするかのように、取り決められてしまっていたのだ。当時の家父長制の下で、男性の身勝手な思惑で「寡黙・貞節・従順」を課せられた女性は、自由恋愛などは以ての他であり、家長である父親の言い付けに従い、ウエセックスに「従順で、控え目で、感謝の心を知り、口数少なに」と警告され、己の存念を打ち消して「務めを果たします」と応えるのが精一杯のヴァイオラは、その夜、ウィルに対して無念の涙で滲んだ手紙を書くのみだ。

しかし、結婚前に、二人には暫しの「盗まれた季節」が訪れる。ウィルがボートの上でヴァイオラへの熱い思いの丈をトマスに語る場面は、『お気に召すまま』(*As You Like*

三幕二場で、主人公のオーランドが愛するロザリンド嬢がギャニミードに男装しているのを知らず、ギャニミードをロザリンドに見立てて、自らの熱い思いを訴える場面を、脚本家たちは思い浮かべていたに相違ない。ウィルの思いを聴いたトマス（＝ヴァイオラ）は、思わずウィルの唇に愛を込めたキスをして舟から飛び降りる。トマスから船賃を受け取った船頭が「お嬢様」と礼を言うのを聞いて、ウィルは屋敷の塀を乗り越え、庭に入り、躊躇なく彼女の部屋のバルコニーへとよじ登り、窓から部屋へ入り込む。トマスの変装のまま部屋に入つて来るヴァイオラとちよど鉢合わせになり、二人は狂おしく抱き合う。

ヴァイオラとの愛の日々と共に、ウィルの筆は勢いを増し、ウィルのヴァイオラに対する思いがロミオのジュリエットに対する思いに反映して描かれる。ところで、ジュリエットという女性名を与えてくれたのは、演ずる芝居の外題は『マキューショ』で、主役だと言われたのに、出番が少なく不満げなエドワード・アレンその人である。また、彼はもう一つヒントを与える。結婚式と追放との間に何か足りない場面があると示唆し、ウィルに哀しいが美しい今生の別れの、後朝きんぎぬの場面を書かせるのだ。そう言えば、ミュージズ女神になってくれると思ひ込んだロザラインにも裏切られて、落胆やげざけし自棄酒を飲みに来たウィルに、新作のヒントを与えたのは、ライバルのマーロウであった。一つ

の芝居を書き上演するには、劇団の仲間たちは無論のことだが、何人もの人たちの手助けが要るのだ。

さて、この映画には鍵となる台詞がある。それは映画の中で四度発せられる“*I don't know. It's a mystery.*”と云う言葉だ。ヘンズロウが三度、ヴァイオラが一度。一度目は、映画の初めで、借金苦に悩むヘンズロウが拷問に掛けられたとき、ウィルの新作の共同経営者として儲け話を金貸しのフェニマンに誘いをかけ、その時は一旦解放されたが、劇場が閉鎖されたままなので芝居の上演が出来ないことを理由に、再びフェニマンとその二人の手下に捕まえられ、危い目に逢おうとしたその矢先、「劇場経営には、とうてい乗り越え難い障害があり、その一つが自然現象だが、それはなかなか現実には来ない。どうすればいいかと聞かれても、何もしません。奇妙なことに、結局、すべて上手く行くんです。手前には分かりません。それは謎です」と言い繕った途端に、饗宴局長ティルニーの命により奇跡的に劇場閉鎖が解かれ、彼は密かに勝ち誇り、その場を逃れる。二度目は、ロミオを演じるはずのヴァイオラが女性であることが彼女とウィルとが舞台裏で愛し合う様子を壁の穴から目撃したウェブスター少年に暴露され、女性が舞台上がってはならないとする当時の法律に触れたため舞台から追放されて不在のまま、『ロミオとジュリエット』は幕

を開けるが、幕開きの序詞役を演じるウオバツシユのどもりが直らないのを舞台袖で聞いていたウイルが思い悩んで隣のヘンズロウに「もうダメだ」と言うとき、ヘンズロウは「上手く行くなり。どのようにだつて。俺にも分からねえが、それは謎だよ」と言う。開幕すると、ウオバツシユは打つて変わつて、物の見事にプロローグの台詞を朗誦し、喝采を浴びる。

三度目は、ジュリエット役の若者サムの声が野太くなつてることが判明する時だ。サムはちょうど変声期に差し掛かり、地方巡業からロンドンの劇場へ戻つて来た時に、ウイルにまた可愛い娘を演じてくれるかと聞かれて、かすれた声で答えたのをウイルは少し心配し、彼の股ぐらを掴んで、「落ちたのか（精液が貫通し男になったのか）」と聞いたことがあつたが、舞台稽古中にサムは女性服のサイズが体に合わなくて苦しいと愚痴を言い、本番で登場する場面が近づき、サムが全く女性の声が出せなくなつたことをウイルに打ち明けるとき、傍にいたヘンズロウは、「また小さな問題か、一旦始まつた見世物は続けなくてはならん。ジュリエットの出番はまだだいたい先だ。何とかなるさ。どうやってだかわしには分からん。それは謎だ」と言う。そして実際に、それはうまく行くのだ。

ヘンズロウがジュリエットを演じる者がいないことを観客席のバーベツジに告げに行くと、すぐ傍に結婚してウエ

セックス令夫人となつたヴァイオラが乳母と一緒に座つて二人の会話を聞いていた。「サムはどうしたの」と尋ねる彼女に向かつて、ヘンズロウから「どちら様ですか」と問われ、ヴァイオラは「トマス・ケント、芝居の台詞は全部暗唱しています」と答え、ジュリエットとして舞台上がることになる。みんな豚箱行きだと嘆じるヘンズロウとバーベツジだが、結局、ロミオをウイルが、ジュリエットをヴァイオラが演じることになり、現実の世界では叶えられなかつた二人の愛が舞台の上で実現されることになる。美しい悲劇として。

四度目は、ヴァイオラの台詞だ。ウイルとの最後の別れの場面で、ヴァイオラは女王の介添えでウエセックス卿から巻き上げた（実は、ヴァイオラの父親からウエセックスがせしめたものだが）五〇ポンドの金袋をウイルに向かつて差し出して、「もう雇われ役者ではないわ。真の愛を描ける詩人への御褒美よ」と言う。「ウイル」芝居とは手を切つた。芝居は夢見る人たちのものだ。夢を見た僕たちがどうなつたか、とくとみてごらん、「ヴァイオラ」私たちが自身がしたことよ。そしてわたしはこれ以外の人生は望まなかつたわ、「ウイル」君を傷つけて、済まない、「ヴァイオラ」わたしを傷つけたことで、もう二度と書かないというのであれば、わたしはそれだけいっそう残念だわ。女王様は喜劇をご所望よ、十二夜を祝して、「ウイル、辛辣

【な口調で】喜劇の主人公は、王国中で一番惨めな男、恋病にかかった奴か」、「ヴァイオラ」始まりは、そうね、その人は公爵としましょう。ヒロインはどうするの」、「ウィル」結婚して売られ、アメリカに行く途中」、「ヴァイオラ」じゃあ、海の上、新世界への旅の途上」、「ウィル」嵐が起きて、全員溺れ死ぬ」、「ヴァイオラ」彼女は広大な何も無い海岸に辿り着き、公爵の許へ赴く、名はオルシーノ」、「ウィル、我にもあらず」オルシーノ。いい名だ」、「ヴァイオラ」貞淑が汚されるのを恐れて、男装して行くの」、「ウィル」そのため彼への愛を打ち明けられない」、「ヴァイオラ」でも、すべて上手く行くの」、「ウィル」どうやって」、「ヴァイオラ」分からない、それは謎よ」。

ウィルは、ヴァイオラを決して年を取らず、色褪せず、ましてや死ぬことのないヒロインに描くことを約束する。ヴァイオラは、彼にとつて掛け替えのない永遠のヒロインとなる。映画の最終場面で、ウィルが自室の屋根裏部屋で白い頁にペンを動かし始める。新作のタイトルは『十二夜』。画面には、新世界行きと思し^{おぼ}しい船が難破し、荒海に投げ出され弄ばれる女性の姿が映し出される。それに重ねて、ウィルの声、「荒々しくうねる大波、勇壮な船はばらばらに砕け、乗船した人々は海に吞まれる。たった一人の女性を除いて。彼女の生きようとする力は荒波の力を凌ぐ。荒海を乗り切って、新しい人生が見知らぬ異国の浜辺

で始まる。新しい愛の物語の始まり、彼女は僕の永遠のヒロイン、彼女の名は、ヴァイオラ」。映画は、ヴァイオラがゆつくりと「素晴らしき新世界」へ向かって歩いて行く姿が徐々に遠景化されて終る。

さて、「それは謎よ」という言葉は、シナリオ作者たちがこの映画の主題として構想した思いをまさに謎解きするものだ。この映画には、芝居に関わることで変貌する多くの人々が存在する。ヘンズロウ、フェニマン、ウィル、バーベッジ、エリザベス、ヴァイオラ、乳母、バツシユフォード、アレン、そしてメイクピース。この中で、その代表格四名を取り上げて解説してみよう。

まずは、高利貸しのフェニマン。映画の始まりで、彼は二人の手下とグルになり、貸した金を取り戻そうと薔薇座の舞台裏でヘンズロウを拷問にかけている。ヘンズロウに新しい劇の共同出資者としての儲け話を持ちかけられて、多額の金利を借り手に吹っ掛ける彼は、算術の天才フリーズに劇上演の収入を計算させ、その話に乗る。彼には劇それ自体には全く興味はなく、ただその手段を利用して、儲けることのみが頭にある。しかし、一旦、ウィルの新作の芝居の稽古が始まると、それを傍らで見物するフェニマンは、次第にそれにのめり込み始める。アレン初め海軍大臣一座の役者たちが地方巡業から本拠地の芝居小屋に戻って

きたとき、アレンにお前は何者と一喝されて、蚊の鳴くような声で、「私はお金です」と答え、「命が惜しくば黙っている。天才が伝説を作り出す様を一心不乱によく見ていろ」と言われて、恭しく平身低頭して、「そのように致します」と応答するフェニマンは、この時点から芝居好きの人間へと急速に変貌して行く。

舞台上で芝居の稽古の最中に、何でも係のピーターがウィルから渡されたばかりの出来立ての台本の内容を、平土間席でヘンズロウに向かい声を立てて講釈しているとき、フェニマンは、とうとうこれに我慢できず、憤然として、犬を蹴飛ばし、ヘンズロウに食つてかかる。「おいこら、おしゃべりは止める。出て行け。(これを聞いてアクションが止まった舞台上の役者に対して)、お騒がせして、幾重にもお詫びを申し上げる。さあ、稽古を続けて下され」と言うのが、彼が「生まれ変わった熱心な芝居大好き人間」になった証拠だ。

その熱意にほだされてか、ウィルは彼に薬屋の役を与える。ロミオに毒薬を売る、台詞は少ないが大切な役柄だ。フェニマンは、極めて熱心に台詞を覚えようとするが、所詮、初心者であり、本番では、慌てて台詞の順番を間違えてしまうが、その方がかえって演技に説得力が増す好結果となる。劇の最終場面で、ジュリエットが自殺するとき、観客席で観劇していたフェニマンは、自慢の緑の帽子

を取つて弔意を示し、舞台の上での迫真の演技に敬意を表す。

第二は、ヘンズロウ。当時の二大劇団は、バーベツジとヘンズロウによって統率されていた。〈宮内大臣一座〉を率い、カーテン座の座主で、有名な俳優でもあったバーベツジに対して、ヘンズロウは〈海軍大臣一座〉を率い、薔薇座を主宰し、主役として娘婿のエドワード(ネッド)・アレンを擁して、互いに覇を競っていた。

ロンドンに疫病が流行したせいで劇場が閉鎖され、当の映画に従えば、恐らく、昨年の九月に薔薇座で『復讐される金貸しの哀れな悲劇』という演目が上演されて以来、何も舞台にかからず、ヘンズロウは借金苦に喘いでいる。高利貸しのフェニマンに返済を厳しく迫られて、彼はウィルが書いているはずの喜劇の題名を勝手に『ロミオと海賊の娘エセル』として、まだ頭の中に大事に仕舞つてあると気のないウィルに執筆を強く迫る。

ヘンズロウの喜劇観は、「大衆の笑いを取るもの、人間違い、難破、海賊の王、少々の犬芸、最後は愛の勝利」を大筋とするものである。実際に、エリザベス女王の宮廷で『ヴェローナの二紳士』が上演され、道化のケンブが舞台の上でアドリブを交えて犬と戯れるのを見物する観客が、女王も含めて大笑いをし喝采するのを見て、彼はウィルに向かつて、「愛と少々の犬芸、それが観客の望む全てだ」

と述べる。しかし、前にも述べた通り、ウィルは喜劇観が変化しようとしている途上であり、自作を観劇中に、あくびをかみ殺している。

『ロミオとジュリエット』が舞台の上で稽古される間も、そして、ウィルがヴァイオラとの実体験を踏まえてそれを喜劇から悲劇へと変貌させていく間も、ヘンズロウはずっと自らが提供した喜劇観に沿ってその芝居が書き継がれていると信じ、犬はどこに出てくるのかとか、海賊の王はどうしたとか、難破はとか、従来観客の笑いを取るだけの喜劇にこだわり続ける。劇の主人公の二人が最後に死ぬ運命を聞かされても、きつと観客は笑い転げるだろうと、皮肉とも、諦めともつかない冗談を言う。

しかしその彼も、この劇の出来栄えには満足し、劇上演が何とか上手くいくように色々と骨を折るし、豚箱に入るのを覚悟の上で、ヴァイオラをジュリエットとして舞台上上げて、劇の行く末を見守り、上演が成功裏に終わると、先頭に立ち、諸手を挙げてそれを祝福する。彼自身の目論見はたとえ裏切られても、素晴らしい出来栄えの悲劇に素直に感銘を受けることに甘んじている。何といっても、やはり芝居大好き人間なのだ。

第三は、ピューリタンの説教師、メイクピースだ。彼は市の立つ町の広場で芝居弾劾の熱弁を奮う。「芝居小屋は悪魔の小間使いだ。カーテン座という名の下に（つまり、

カーテンの影に隠れて）、役者どもはお前たちの女房には淫らさを、召使には反逆心を、徒弟には怠け心を、子供たちには悪戯心を植え付ける。薔薇座はどんな綺麗な名で呼ばれても、腐った臭いを放つ（この言葉は、ジュリエットの「薔薇はどんな名前と呼ばれても、同じようにいい香りがするわ」を踏まえている）。双方の芝居小屋に疫病（神の祟り）が降りかかるがよい（この言葉を聞いたウィルはいずれ劇作に利用できると思い、彼に感謝して十字を切る、実際に、この言葉は、マキューシオが死ぬ間際における罵りのセリフ「両家とも呪われよ」に呼応する）」。

メイクピースは、いかにも娯楽嫌いのピューリタンらしく、芝居小屋が悪の巣窟であるとして芝居見物を指弾し、人々が芝居見物に行くのを止めようとするが、新作『ロミオとジュリエット』を見物に行こうとする大勢の人波に押されて否応なく劇場内へと飲み込まれる。皆に静かにするように強要されて、仕方なく芝居を見物することになるが、劇の最後には感動のあまり、我にも非ず、誰にもまして涙ながらに拍手喝采を贈ることになる。実体験によって劇の素晴らしさを感じたのだ。

最後の例は、エリザベス女王その人だ。女王は、饗宴局長ティルニーを介して、劇団を宮廷に呼び寄せて芝居を演じさせるほど一見芝居好きに描かれている。ところが、『ヴェローナの二紳士』の上演中に、道化のケンブが犬芸

を披露し、アドリブを連発して観客の笑いを取るときには、犬に呼びかけて「見事じゃ、クラブ殿、褒めてつかわす」と呼びわり、舞台上の犬にお菓子を投げ与えてご機嫌だが、恋するヴァランタインを演じるコンデルが「シルヴィアがいなければ、光は光ではない。シルヴィアがいなければ、喜びは喜びではない・・・」と愛のセリフを独白するとき、半ば眼を閉じて眠っている。芝居では、本当の愛は描けないと思っていて、芝居の上での作りものの愛のセリフにはさして興味がなく、不満なのだ。

この映画において一つの核心的な場面がある。当時貴族が結婚するときには女王陛下の承認を必要とした。ウエセックス卿がヴァイオラを引き連れて、グリニッジ宮殿で女王に謁見する場面がそれである。女王とヴァイオラが対峙して、女王に「そなたには見覚えがある、宮殿での芝居の常連である者だな、芝居がそれほど好きか」と問われ、緊張のあまりか細い声で「女王陛下」としか応えられないヴァイオラに、女王は「大きな声で答えよ。そなたに女王陛下と呼ばれるまでもなく、わたしがだれなのかは自分でよく分かっている。そなたは王と女王の物語が好きか、武勲の物語か、それとも宮廷風恋愛の物語か」と聞かれ、ヴァイオラは「芝居そのものが大好きです。とりわけ、詩が好きです」と言うと、女王に「ウエセックスよりもか」とかかわれ、周りの貴族たちの笑いを誘う。そして女王の「劇

作家は愛について何も教えてはくれぬ。愛を小奇麗に描くか、コミカルに描くか、情欲に描くかだ。彼らには本当の愛は描けぬ」という評言に対して、ヴァイオラは思わず口を滑らして「いえ、描けます。確かに、描いてはいませんが、これまでも描いては来ませんでした。描ける詩人がいると信じております」と言うと、それを聞いていた宮廷人たちはどうなることかと息を飲み、女王はまじまじと彼女を観察し、ウエセックスは怒り心頭に発し、女装しヴァイオラの付添として来ていたウイルは自分のことが言われているのだと悟って感動する。

ウエセックスが下手な弁護をしようとして、「ヴァイオラ姫は世間知らずです。女王陛下は世の中のことは何でもご存知のご経験豊富な御方。仰る通り、自然と真実は芝居演技の大敵。わたくしめの財産を掛けてもよろしいです」と平身低頭するが、女王に「財産がすっからかんだから（金持ちの令嬢との結婚の許可を得るため）ここに来たのかと思っておったが」と揶揄され、ウエセックスは誰かを殺してやりたいと思うほど恥で殺気立つ。女王が「では、そなたの賭けに応じる者がだれかいるか」と言う^{のたま}と、ヴァイオラの付添に女装したウイルが「五〇ポンド」と応じる。（五〇ポンドは、ウイルが劇団の株主になり、一人立ちするため必要とする金額と同じだ。因みに、現実にはシェイクスピアが三〇歳半ばで故郷のストラットフォードに、その町で

二番目に豪華な屋敷を購入した時の値段が六〇ポンドであった)。ここで、隠れた形で、ヴァイオラの一言を巡って、ウエセックスとウィルが対峙する構図となる。女王はまだ決着がついていないとして、面白半分はその賭けの証人を買ってしまう。

ロミオをウィルが、ジュリエットをヴァイオラが演じて、大成功裏に芝居が終わり、観客の鳴り止まぬ拍手喝采の内に一座の役者たちがカーテンコールを受けている最中に、饗宴局長のティルニーが部下たちを引き連れて舞台に乗り込んで来る。女性を舞台上からさせた罪を糾弾するためだ。ちょうどその時、身分を隠して観客の中に紛れ込んで観劇をしていたエリザベス女王が姿を顕わにし、ジュリエットを演じたトマス・ケントが本当は男性か女性かどくと検分しようと主張する。面前にジュリエット(ヴァイオラ)を呼び出し、ヴァイオラが“curtsy”(女性特有のお辞儀)を思わずしようとすると、眼で合図して“bow”(男性特有のお辞儀)に変更させ、事の真相が分かっているながら、ジュリエット役者を男と認め、男でありながら見事な変装ぶりだと褒め、無罪放免を言い渡す。

この芝居が舞台の上で本物の愛を描いて見せたことを認め、ウエセックスに賭けはそなたの負けだ、五〇ポンドは収まるべき場所に収めよと説諭する。だが、「神が結婚で結び付けた兩人を、私といえど引き裂くことはできぬ」と

言って、ヴァイオラと知っていながら、ケントに向かつて、今度はもつと愉快的芝居を十二夜のために書いて、とシェイクスピアに伝えなさいと言付ける。そして、帰りの馬車に向かうとき、その前に水溜りがあるのにやや躊躇とまどうが、お抱えの騎士たちがマントを水溜りの上に広げるのを待つ間もなく、「遅すぎた、遅すぎた」と独り言を言って馬車で去っていく。(これには有名な逸話があり、実際に、一五八一年にサー・ウォルター・ローリー Sir Walter Raleigh 卿が「さー、わたられい」と言って、女王の前の泥濘に高価なマントを広げて、女王を通したという。)

この「遅すぎた」という言葉は、暗示的である。もちろん、即物的には、マントを広げるのが遅すぎた、わたしはもう水溜りを服を汚して通り越した、という意味であるが、女王がウィルとヴァイオラに肩入れしていることを考え合わせると、神の前で結婚してしまったからには、すべてが遅すぎたと言わんとしているのかも知れない。

以上のように、芝居がなぜ人を変えるのか、それこそまさに「謎」であるが、その謎解きは、観客・読者の一人ひとりに委ねられている。

(使用テキストは、Mare Norman & Tom Stoppard, *Shakespeare in Love*, ed. by Fumiko Kosai & John Cronin, Shohakusha, 2000)